

悲劇の言語学者ラスムス・ラスク : サンクト・ペテルブルグでの生活

山本, 文明

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

153

(終了ページ / End Page)

185

(発行年 / Year)

2009-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007221>

悲劇の言語学者ラスムス・ラスク

——サンクト・ペテルブルグでの生活——

Rasmus Rask, a tragic linguist

——his life in St.Petersburg——

山本文明

YAMAMOTO Fumiaki

(拙稿は「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——誕生から大学入学まで——」(『異文化』6)、「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——大学入学直後——」(『異文化』7)および「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——新しい言語研究への道——」(『異文化』9)に続くものである。)

ストックホルムを出発したラスクは、まずウプサラ地方のバルト海西方の海岸の町グリスレハムから、バルト海とボスニア湾を分けるオーランド島(Åland)に行き、それからフィンランド本土の現在のトゥルク(Turku)に渡った。トゥルクは、スウェーデンの対岸にあるバルト海を臨む都市で、当時はまだスウェーデン領だったころの名前を残してオーボー(Åbo)と呼ばれていた(フィンランドは、1155年~1809年はスウェーデンの統治下にあったが、ナポレオン戦争のあおりで、1809年~1917年はロシアの領土になった。つまり、ラスクが訪れたフィンランドは、ロシアの支配下の大公国になってそれほど時間がたっていなかったことになる)。トゥルクの建設は1229年で、1812年にヘルシンキにその地位を譲るまでは、フィンランドの首都であった。つま

り、ラスクが訪ねたトゥルクは、当時のフィンランドの文化の中心のひとつであった。現在では、スウェーデンのグリスレハムからフィンランドのトゥルク間には、カーフェリーが通っているが、当時はそのような航路はなく、氷の海の中を船で行くほかはなかった。酷寒の2月、悪天候に翻弄され、何度か天候の回復を待つために、オーランドの島々に停泊しながらの過酷な旅であった。

ラスクが厳しい気候条件の下での旅の末にトゥルクに到着したのは、3月1日のことであった。生来身体の弱いラスクであったが、到着するや否や始めたのは、フィンランド語の勉強であった。正確に言い換えると、ラスクはすでにフィンランド語の文法についてはよく知っていたので、フィンランド語が専門のネイティブ・スピーカーについて、仕上げと確認をする作業を始めたのである。彼がフィンランド語を習ったのは、フィンランド人の言語学者でありオーボー・アカデミーの講師だった、後に称号教授になったグスタフ・レンヴァル (Gustaf Renvall)(1781-1841) である。レンヴァルは、ラスクのフィンランド語を記述するようにという提言に従って新しいフィンランド語文法を書き始め、ラスクのアドヴァイスを求めたりもした。ラスクの言語観を知り、ラスクを尊敬していたレンヴァルについてフィンランド語を学ぶのは、ラスクには自然なことであった。コペンハーゲン大学司書ニュロップに宛てたと思われる1818年3月24日の手紙の中で「オーボーでは、私は全身の力をこめてフィンランド語を学びました。人々は、あまり重要とは言えない彼らの言語に私が堪能なのを賞賛しました。」と書いている。長くスウェーデンの支配下にあり、当時はロシアの支配下にあったフィンランド人にとっては、フィンランド語は誇りをもてない言語であった。彼らにとっては、長い間独立できないでいる弱小国の弱小言語を、外国人が流暢に話すのが不思議でもあった。また、同じ手紙の中で「オーボーで、私はフィンランド語に非常に強いひとりの人物、レンヴァル講師と出会いました。彼は、14日間、毎晩、5

時から9時か10時まで教えてくれました。とてもありがたかったのは、懸賞論文で提唱したフィンランド語の名詞の変化や動詞の活用の組織を再認識できたことでした。」と述べている。言語的に信頼できるネイティヴ・スピーカーから、集中的に言語を習得するというラスクの方法論が功を奏したのである。ラスクが、フィンランドの言語や習俗を懸命に習得しようとした目的は、ロシアにおけるフィンランド語の出自、とくにグリーンランド語の起源の解明にあった。

ラスクはレンヴァルからフィンランド語を学ぶだけでは満足しなかった。彼の言語研究の特徴は、フィールドワークとして、さまざまな地方に出かけて、その土地土地の生の言語、方言に接して、その言語の全体像を把握することであった。限られた予算の中で、助手を常時同行する経済的な余裕はなかったが、フィンランドでは、ラスクは学生を助手兼道案内として伴い、ロシアへ向かう道すがら、言語調査をしていった。長いスウェーデンの統治の影響から脱せずにはいた当時のフィンランドでは、フィンランド語とスウェーデン語の二言語使用が定着していた。純粋なフィンランド語を聞きたいと願うラスクは失望を覚えた。それは、ちょうど1813～1815年のアイスランドの調査旅行で、デンマーク語の浸透のために、純粋なアイスランド語が聞かれなくなっていることを嘆いた状況とよく似ている。その上、新しい宗主国であるロシアの言語であるロシア語が、いずれこの国に強い影響を与えるであろうことも明らかなことであった。言語は、優勢な言語文化に接すると、しばしば二言語使用を経て、危機言語となり、絶滅へ向かう。そのころのフィンランド語は、まさに言語的には絶滅の危機を経験していたのである。ラスクは、フィンランド人の言語学者たちに、母語がいかに大切かを認識させ、彼らのフィンランド語研究に刺激を与えた。母語を大切にする必要性をフィンランド人に説いたのは、フィンランドが長く外国の支配下にあったために、誇りがもてずに母語をないがしろにして、危機言語になる可能性を、ラスクが痛切

に危惧したからにはほかならない。

ラスクは、当時の唯一の交通手段である馬車に、蔵書と資料、いわば小さな「移動書齋」を積んで、オーボー(＝トルスク)を出発し、ロシアのサンクト・ペテルブルグに向かった。ラスクは、フィンランドで、フィンランド語の研究だけをしていただけているわけではない。ラスクは常に複数の言語の研究を並行して行っていた。フィンランド語と同時に、母語のデンマーク語は言うにおよばず、アイスランド語、ラテン語、ギリシャ語等々の研究を継続していた。そのための移動書齋であった。ここでまた、ラスクには不運が襲いかかる。途中で、馬の扱いに慣れていない少年御者に馬が怯えて、馬車がひっくり返ってしまったのである。上掲のニュロップの手紙にはつぎのような記述がある：「トランクが左の膝の上に落ちました。ひどい衝撃を受け、足も捻ったので、てっきり骨折したと思いました。場所は、タヴァステヒュス(Tavastehus)から10スウェーデン・マイル、ヴィボリ(Viborg)から15スウェーデン・マイルで、近くにスウェーデン語やドイツ語の単語が分かる人もいませんでした。でも、幸いなことに、けがは思ったほどひどくはありませんでした」。つまり、フィンランド湾に沿って東へ向かう途中で、現在はロシア領になっているサンクト・ペテルブルグの手前の町、ヴィボリに到着する前に事故にあったのである。ラスク自身は、てっきり足の骨が折れたと思ったほどの衝撃であり、これから先の長い旅を考えると一時は悲観的になったが、大事に至らなかったのは不幸中の幸いであった。

スウェーデン語もドイツ語も通じない田舎での事故で、しかも冷たく陰鬱な気候の中で、心細い思いをしたのである。知らない環境でことが通じないほど不安なことはない。今日のように通信手段や交通手段が近代化されていても、海外で事故に遭うのはつらいものである。ラスクは、フィンランド語は周りがおどろくほどできたとは言え、緊急時にその土地の方言の話し手とコミュニケーションをとる言語とし

ては、心細かった。なにより、母語のデンマーク語はさておき、当時の北欧では、大国の言語として影響力が強かったドイツ語や、長く支配階級の言語であったスウェーデン語が通じない孤立した土地というのは、命にかかわる問題であるだけでもどかしく、ラスクの不安を助長した。すでに述べたように、ラスクは1812年のスウェーデン・ノルウェー旅行の際に、自分で手綱を握っていた馬車を、雪道で転倒させ、馬車の下敷きになったことがあった。このときもたまたま大事には至らなかったのだが、言語がお互いに通じる北欧での事故だったの比べると、今回はけがもさりながら、言語や文化的不安という意味で、このフィンランドの片田舎の出来事がラスクに与えた精神的ダメージは大きかった。現在と異なり、当時の旅に危険はつきものとは言え、旅行のたびに、悪天候に悩まされ、事故につきまといわれるラスクには、背負わされた宿命のようなものを感じざるを得ない。

ラスクが、サンクト・ペテルブルグに着いたのは、1818年3月27日であった。その前に立ち寄った馬車の事故直後の町、ヴィボリには3日間滞在したが、ラスクは、この町をあまり好きにはなれなかった。ひとつには、事故のショックの後遺症で気持ちが落ち込んでいたことがあったが、もうひとつは物価が高く、心の休まる住みやすい町ではなかったからである。やっとヴィボリを発ち、旅の当初からの予定に入っていたサンクト・ペテルブルグに着いたときはほっと胸をなでおろした。

しかし、期待してたどりついたサンクト・ペテルブルグも、ラスクの心に安らぎを与えてくれる町ではなかった。サンクト・ペテルブルグは、現在ではドイツ語風にこう呼ばれ、文字通り聖ペテロに因むが、ロシアがピョートル大帝のときに獲得した領土である。ロシアがドイツと戦争状態になるにおよんで、名称がロシア語のペトログラードとなり、後にソビエト連邦の建国の父レーニンに因んで、レニングラー

ドと呼ばれたこともあったが、ソビエト連邦崩壊後は再び、サンクト・ペテルブルグに戻った。この名称は、聖ペテロと同時に同語源のピョートルにもかかっている（日本語で、聖書の中で、一般に用いられているペテロという名前は、元来はギリシャ語の Πέτρος [ペトロス] がラテン語で Petrus [ペトルス] となり、ヨーロッパの諸言語に入った）。サンクト・ペテルブルグは、元来はスウェーデン領であったが、大北方戦争 (1700-1721) の際に、ロシアが奪取した土地に建設した人工的な都市である。地理的に西ヨーロッパと東ヨーロッパの中間にあることから、現在でこそ両文化の架け橋となっているが、当時の状況下では、北欧文化に誇りをもつラスクには、もともと北欧の領土であった土地がロシア人に奪われ、人工的に作り変えられた事実が、この町を許容できない気持ちの根底にあったことも否定できない。ラスクには、サンクト・ペテルブルグは、虚飾と人工的要素があまりにも多すぎる町であった。

それでも、心ならずも、ラスクはこの町で、1818年3月27日から1819年6月13日までの15ヶ月間を過ごすことになる。ラスクは、最初のうちは短期間だけ、スウェーデン人宅に寄宿し、それからあるドイツ人仕立て屋の家に間借りすることになったが、いずれ住所が変わるかもしれないという理由で、郵便物の配達先としてはドイツ人宅ではなく、イギリス人牧師やフィンランド生まれの高校の宗教教師宅とした。どのような理由で、ラスクが、ドイツ人宅に間借りしたのかは分からないが、郵便物の配達先は、毛嫌いするドイツ人よりも、キリスト教関係者の方が信用できる存在であった。キリスト教と距離を置こうとしながらも、キリスト教の信仰に関与する人間への信頼は失っていなかったのである。

スウェーデン滞在中、故国デンマークからの便りが少なく、ラスクは自分のことは友人・知人は忘れてしまっていると感じていたことはすでに述べた。サンクト・ペテルブルグでも、その状況は変わらなかつ

た。1818年4月14日付の、いつもラスクのよき理解者であるニュロップ宛の手紙で、「私は、残念ながらスウェーデン経由ではありますが、たくさんの手紙を書きました。スウェーデンからは100通以上の手紙を受け取りましたが、この町に到着以来、祖国からは一通も受け取っていませんでした。」と、祖国からの疎外感を書き綴っている。サンクト・ペテルブルグ到着後まだ一ヶ月も経っていないところで、信頼できないドイツ人の家に住み、知人もいないロシアでの孤独な生活は、ラスクにはつらいものであった。

西ヨーロッパと東ヨーロッパの架け橋的位置にあるサンクト・ペテルブルグの言語的環境は、ラスクのような多言語を習得している言語学者にとってもめまぐるしかった。1818年4月3日付のアウセーリウス宛の手紙にはその様子がつぎのように描写されている：「昨日、私は(1)ラテン語、(2)フランス語、(3)ドイツ語、(4)スウェーデン語、(5)デンマーク語を話し、その上、ロシア語の話を聞きました。それで、私はほとんどバベルの塔の崩壊のような混乱の中に置かれ、ここで話されているこれらの言語によって頭の中がおかしくなったような感じがするほどです」。複数の文化が接する町での多言語使用の実情は、ラスクの想像をはるかに超えていたのである。

また、オーゼンセのラテン語学校時代の恩師のひとりであり、後にコペンハーゲン大学の数学教授になった C.F. ダイエンが、サンクト・ペテルブルグにいるラスクにロシア語で手紙を書いたことがあった。それに対する1919年2月18日付の返信が残っている。ラスクは、その冒頭でつぎのように述べている：「私は、先生のありがたいお手紙、とくにそれがロシア語で書かれていることを見て少なからずおどろきました。同じ言語でご返事を差し上げるべきかもしれませんが、毎日ロシア語を話しているにもかかわらず、私はロシア語を完璧に話したり書いたりするまでには至っておりません。さらに毎日ドイツ語とス

ウェーデン語、しばしば英語、ときどきデンマーク語とラテン語を話し、同じくらいの数のアジアの言語を研究しております。それで、それらが混ざり合わないよう、また言語の多さで混乱を起こさないように、私はいつも母語に戻ることにしています。母語は、私にはかけがえのないものですし、未来永劫かけがえのないものになるでしょう。通用し、使用可能なところでは、私はどこでも母語を使います」。要するに毎日ロシア語を使う環境にしながら、まだロシア語の熟達度に謙虚さを示すのは、言語の専門家としての完璧主義のラスクの性格を表わしているとは言え、少しへりくだりすぎて、せっかくロシア語で書いてきた恩師には失礼とも言える答え方である。ロシア語の手紙にはロシア語で返事を書くのが礼儀だろうが、自分は取えて母語のデンマーク語で返信する旨の執拗とも言える前置きとなっている。また、この返信の内容は、サンクト・ペテルブルグという国際都市の喧騒の中で、ラスクがコペンハーゲンにいたころと変わらず、いくつもの言語に日常的に親しみ、同時に研究していたことの証しともなっている。

ラスクにとっては、多言語使用の文化の中で、さらに日常的に用いる多言語の他に、非日常的な多くの言語を研究対象として生きる上で、頭脳の均衡、心のバランスを保つよりどころは、母語のデンマーク語に回帰することであった。そのような国際都市サンクト・ペテルブルグでの特殊な状況とは別に、ラスクが、言いたかったのは、母語の重要性であった。小国デンマークでは、思想・思考の発信の手段として、大国の言語に頼らざるを得ないことが多かった。それ故、デンマーク人の研究者は、必要に迫られてさまざまな外国語を習得し、それらの言語を使つてのコミュニケーションが可能であった。ダイエンは、そのような環境の下で大国の言語のひとつであるロシア語でラスクに手紙を書いた。ダイエンとしては、数学者ではあるが、ロシアに住むラスクへの敬意もあったであろうし、ロシア語ができることを誇りたい気もあったであろう。ロシア語で書かれた手紙であったとは言え、ラ

スクが受け取る貴重でありがたい数少ない手紙の一通であったはずである。しかし、ラスクは、多くの言語を習得し、研究してきたからこそ、無用に大国の言語に依存し、母語をないがしろにすることに我慢ができなかった。わざわざ手紙をくれた恩師ダイエンへの感謝の気持ちはあっても、このような母語重視の返事を書かざるを得なかった心情から、当時のラスクのいら立ちや不安が容易に推測できる。それに、ラスクは1818年10月12日付のニュロップ宛の手紙に「コペンハーゲンを出発して以来、ダイエン教授から何のお便りもありませんから、ダイエン教授の数学のご友人を訪ねてはおりません。」という一節がある。ダイエンは、ラテン語学校時代、ラスクの数学的才能、「発見的天才」を認め、基礎的な授業を免除して個人授業をした方がいいと提案したくらいだから、ラスクはダイエンからサンクト・ペテルブルグにいる友人の学者を紹介してもらうことを期待していた。しかし、そのダイエンからの手紙は久しく届かなかった。やっと届いた手紙はロシア語で書かれていた。このロシア語の手紙は、懐かしさとありがたさとに相反して、ラスクのいら立ちを増幅させたのである。

ラスクのいら立ちのひとつは、サンクト・ペテルブルグの滞在中に出会ったドイツ人やフランス人の学者たちによってもたらされた。何より、ラスクの心を逆なでしたのは、ドイツ語・ドイツ文化の横暴であった。当時、ヨーロッパ北部での大国ドイツの言語・文化の影響力が大きかったことは否定できない事実だが、そのことによって北欧の言語・文化が軽視されることは、ラスクにとってはとうてい我慢できることではなかった。ラスクが『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』(1811年)を公にしたときの、J. グリムとの手紙のやり取りにはすでに触れたが、そのときのラスクの主張は、グリムがゲルマン語の中で、アイスランド語・デンマーク語・スウェーデン語・ノルウェー語のような北欧諸語より、ドイツ語が優位であると考えていることに

対する反論であった。グリムが『ドイツ文法』というタイトルの下でゲルマン語全体を論じていることに、グリムのドイツ語至上主義が象徴的に現われていた。ラスクは、北欧諸語とドイツ語は対等の言語であると主張したのである。国力の優位が、言語の優位につながるようなグリムの思考形態、さらに、大国が小国を見下すようなグリムに代表されるドイツ人の思考形態の誤りを正そうとしたのであった。サンクト・ペテルブルグで突出していたドイツ語・ドイツ文化に、ラスクは、またもや1811年当時と同じような憤りを感じたのである。

1818年8月5日付のコペンハーゲン大学神学教授ミュラー宛の手紙には、その憤りを如実に示す一節がある：「これまで当地では、教養ある人たちの間ではドイツ文学がほとんど絶対的ですし、ドイツ人はいつも北欧人を否定的な視点から解説するか、私たちの仕事や貢献をすべて隠してきましたので、このロシアでは、これまでデンマークやスウェーデンに文学が存在していたことは知られていませんし、北欧に低地ドイツ語の方言以外の言語があったこともほとんど知られていませんでした。この町の最も大きなふたつ図書館でも、デンマーク語の本には一冊も出合ったことがありません。容易にお分かりのように、ここではよほどがんばらないと、ドイツ人に話を聞いてもらうという最小限のことをすることさえできないのです。あるテーマの代表的著作に話がおよぶとすぐに、(ドイツ人)「それは何語で書かれているのですか？」——(ラスク)「デンマーク語です。」——(ドイツ人)「えーっ！」のような会話にかならずなるのです。私がデンマーク語の平易さと簡潔さの話をすると、「そうですか、たぶん翻訳されるでしょう、リュースがデンマーク語をよく知っていて、利用しています…」(リュース、すなわち Christian Friedrich Rühs(1781-1820)は、ベルリン大学歴史学教授を務めたドイツの歴史家・文献学者で、1812年に『エッダ』(Die Edda)の著書がある)。

さらにつづけて、ラスクはドイツ人の教養ある貴族とのつぎのよ

うな会話の様子を、効果的な臨場感を漂わせるために、生々しくドイツ語のままで、綴っている：(ドイツ人貴族)「デンマーク人も文学を生み出してきたと思いますが、バッゲセンのような人たちはドイツ語でかなり上手に書いていますね。」(バッゲセンとは、Jens Baggesen(1764-1826)のことで、デンマークの詩人だが、ドイツの貴族たちと親交があり、しばしばドイツ語で詩を発表した)——(ラスク)「でも、私たちが主に貢献しているのはそんなことではなく、詩や歴史、またもっと厳密な学問でも、普通に認められた価値をもつ優れた仕事をしているのですよ。」——(ドイツ人貴族)「でも、どうしてドイツ語で書かないのですか？」——(ラスク)「私たちがドイツ人でなく、デンマーク人だからですよ。」——(ドイツ人貴族)「えーっ！なぜそんな方言を文章語に発展させようなんて考えをもつのですか？どんな利点があるのですか？約100万人の話し手しかいないのですよ。」(確かに、当時のデンマークの人口は約100万人であった)——(ラスク)「デンマーク語を、10倍も大きな国の言語に少しも遅れをとらないほどに発展させることに成功したら、公平に判断する人なら、私たちの存在が小さければ小さいだけ、それだけ大きな名誉を与えてくれると思いますよ。」——(ドイツ人貴族)「そうだとすると、あなた方もどっちみちゲルマン人起源、血統はいいですね。国民性にどんな意味があるというのですか？大きな本体から分離しようとする試みにどんな意味があるのですか？」——(ラスク)「デンマーク国民はドイツ国民とほぼ同じですし、私たちは大きな本体から分離しているわけではありませんが、自然が私たちに示す立場を主張してきただけなのです」。

ミュラーに宛てたラスクのこの手紙から知り得るのは、小国デンマークの当時のヨーロッパでの認知度の低さ、大国ドイツから見た存在の小ささである。小さな存在を無視して生きてきた大国ドイツの教育を受けた貴族に、デンマークおよびデンマーク語・デンマーク文

化の存在を認めさせようと、懸命に説得しようとしているラスクの気持ちのもどかしさが現われている。ドイツ人貴族にとっては、たかが100万の人口しかない北欧の小国デンマークは、それまでの彼の生活とは無関係な、無視しても何の問題もない存在であった。そのような小さな国から来た小さな言語学者が、口角泡を飛ばして、母国の存在を主張し、母国の言語の独立性を主張する理由が理解できなかったことであろう。ラスクが、元来、ドイツに対してもっていた反感は、サンクト・ペテルブルグでのこれらの出来事によって、さらに大きくなっていった。一時期に同時に常人では考えられない数の言語を駆使しながら、言語的混乱をまねがれてきたラスクであるが、大国の傲慢さへの嫌悪感、その根底にある小国出身者故の悲哀、慣れない外国文化の中での孤独は、ラスクの中で解きほぐせない精神的混乱を生み出しつつあったのである。

サンクト・ペテルブルグでは、ラスクはドイツ人ばかりでなく、フランス人にも失望した。ラスクは、もともとフランス文学に魅力を感じていなかった。オーゼンセのラテン語学校時代には、ラスクの才能を高く評価した、ドイツ語・フランス語教師スーアに、ドイツ語ほどではないが、「フランス語も、完璧とはいかないが、かなりよくできる。彼は作文で間違いを犯すことがますますまれになっている。」と記録簿で評価され、スーアから個別にフランス語の本を借りたりしていた。しかも、サンクト・ペテルブルグでは、フランス語を、ドイツ語やロシア語とともに、日常生活で用いていた。しかし、ラスクは、生涯フランス語・フランス文化に特別な興味を示さなかった。彼は、1824年に独自に考案した『スペイン語文法』をデンマーク語で著し、1827年には、短いものだが、自分のスペイン語文法に基づいた『イタリア語文法』を著している。それにもかかわらず、彼はフランス語の文法は苦かなかった。スーアの記録簿での記述は微妙な表現だが、ラ

テン語学校時代のラスクは、フランス語にそれほど強い興味をもっていなかったのではないかと推測される。その後も、彼は必要な情報を吸収するための言語、あるいは言語構造の比較のための言語材料としてのフランス語の価値を認めていたけれども、魅力的な文化を背負った言語とは感じていなかった。それが、同じイタリック語派の言語のうち、スペイン語とイタリア語の文法は書いたが、フランス語の文法を書かなかった理由だと思われる。

ラスクは、サンクト・ペテルブルグでも、何人かのフランス人の学者と知り合いになったが、親しくはならなかったようである。彼には、フランス人は、ドイツ人のような傲慢さはなかったけれども、フランス文学に価値が見出せないように、フランス文化そのものに魅力を感じず、その延長として、フランス人学者にも価値を見出せなかったのである。フランス文化になじめなかったというのが正鵠を射ているかもしれない。とくに、ここで出会ったフランス人のオリエント学教授、ドゥ・マンジュ (De Mange) に失望した話が残っている。ラスクは、サンクト・ペテルブルグでも、アジアの諸言語のひとつとしてサンスクリット語も研究対象としていたので、当然のことにドゥ・マンジュ教授に近づいた。イエスベルセンは『ラスムス・ラスク』(p.31)で、そのときの様子を、6月11日付のラスクの手紙から、つぎのように引用している:「ここには、サンスクリット語の専門家と称するドゥ・マンジュというフランス人教授が招聘されています。私は彼のもとへ出かけ、教えを請いました。すぐに彼は一語一語に古い注釈のついた写本を見せてくれました。しかし、それはサンスクリット語ではなく、少なくとも綴りからは、ベンガル語だと指摘すると、驚き、狼狽しました。彼はその後で正しい(印刷された)サンスクリット語文法もち出しましたが、彼が読むと、自信がなさげに発音し、口ごもり、一語おきに間違えましたので、しばしば私が訂正を入れました。というのは、私自身、1811年にセランプォアで正しいサンスクリット語で印

刷されたヨシュア記と士師記等をもっているからです」(セランポア Serampore は、カルカッタの北20km、西ベンガル地方にある都市で、1755年～1845年まで、フレゼリクスナーゴア Frederiksnagore として、デンマークの植民地であった)。サンスクリット語関連の資料の乏しかった当時としては、ラスクは少しでも先達からの情報がほしかった。ところが、期待して教えを受けに行ったサンスクリット語の専門家であると言われていたフランス人教授、ドゥ・マンジュの知識は浅かったのである。教えを請いに出かけ、失望させられた学者が、たまたまフランス人だったわけだが、ラスクのフランス観はますます悪くなった。同時に、ラスクは、人間関係という点で、ここでも世間を狭くしたのである。

さて、ロシア領サンクト・ペテルブルグでは、大きな図書館にもデンマーク語の本が一冊もなかったことはすでに述べた。20年もたたない前はスウェーデン領であったにもかかわらず、北欧関係の書籍がほとんど見られなかった。ラスクは、ここで北欧の文化が認められていないのは、北欧に関する情報がないからだと考えた。現在のように、通信手段が発達し、インターネットや携帯電話が急速に普及している社会と異なり、当時、情報を知的に客観的に発信する手段は、書籍や新聞・雑誌しかなかった。とくに、ドイツ人がデンマーク語・デンマーク文化を齒牙にもかけないような発言をするのは、情報不足に起因する認識不足のせいだと考えた。そこで、ラスクは、自分の言語研究のかたわら、サンクト・ペテルブルグで、北欧の書籍を扱う本屋を開きたいと考えたのである。デンマーク領事の協力を得ながら、計画を進めたが、輸送手段の発達していない当時、安全に安定して書籍を供給することはたやすいことではなかった。コペンハーゲンのニュロップやミュラーも動かし、実際に書籍を船便で送ってもらったのだが、それらの積荷は、船長が密輸の嫌疑で拘束されたために、不運にもラス

クの手元に届くことはなかった。この事件は「青天の霹靂でした」と、ラスクは9月28日のミュラー宛の手紙で語っている。北欧文化の普及のために役立つと思い計画した書店設立であったが、結局は不成功に終わった。ラスクは、軽視されているデンマーク語・デンマーク文化を、ドイツ語・ドイツ文化と対等な地位に高めることに躍起になったのだが、思いを遂げることはできなかったのである。このとき、ラスクはちょうど30歳。社会経験に乏しく、身分は不安定で、経済的な援助もなしに、一介の言語学者が、いわば起業を試みたわけだが、研究の片手間の仕事がうまくいくわけもなく、世間はそれほど甘くはなかったと言うべきであろう。別の観点から見ると、この書店設立は、ラスクの欲求不満の捌け口であったかもしれない。あるいは現実からの逃避という表現が当たっているかもしれない。なじめない外国での不安定な研究生生活だけでは、精神のバランスが保てなかったのではなかったかとも思われる。思いついたことをすぐに行動に移すラスクの性格もあったであろうが、小国の名もない言語学者には、エネルギーを発散する場が必要だったのかもしれない。その引き金になったのが、上記の会話に象徴される、ドイツ人のデンマーク文化軽視とそれに対するラスクの強い反発であったことだけは確かである。

しかし、ラスクは、サンクト・ペテルブルグで、ぎすぎすした生活を送り、人に対立ばかりしていたわけではない。彼はここで生涯親交の絶えなかった友人を得た。その友人とは、ロシア人の研究者イヴァン・ニコライエーヴィッチ・ロボイコ (Ivan Nikolajevič Lobjko) (? -1861) であった。ロボイコは、後に、現在のリトアニアの首都ヴィリニウス (Vilnius) のヴィリニウス大学のロシア語・ロシア文学教授となった学者で、ラスクと同じ時期にたまたまサンクト・ペテルブルグに滞在していた。今までのところ生年が不明なので、当時のロボイコの正確な年齢は分からないが、両者の意気投合ぶりから判断すると、

おそらくラスクと同じくらいの年であったろう。故国を離れて言語研究に情熱を注いでいる若い研究者同士、ふたりは気が合った。ふたりは、毎晩、お互いの母語を教え合った。ラスクは一日おきにロボイコにデンマーク語を教え、ロボイコは一日おきにラスクにロシア語を教えた。ロボイコは、教養も人柄も優れており、ラスクにとっては自分の思いのたけを打ち明けることのできる相手であった。ラスクがドイツ人仕立て屋の家に間借りしていたことはすでに述べたが、1818年11月半ばからは、ロボイコのもとに引っ越している。このことも、ふたりの親密さをよく示している。

ラスクの生涯の畏友ペーターセンの『ラスムス・クリスチャン・ラスクの生涯についての寄稿』(p.38)によれば、ふたりの会話の内容は、もっぱら北欧文学や北欧民族についての話題や楽しみになったようである。つまり、ラスクが一方向的に北欧について語るようになった。ロボイコは、ラスクにとっては、いい生徒、いい聞き手となったのである。このことは、ちょうどオーゼンセ・ラテン語学校時代に、ラスクがペーターセン始め友人たちを相手に、ノルド語に関する自分の考えを熱く語った光景を思い出させる。ラスクは、8月5日付のミュラー宛の手紙で、上述のドイツ人との不愉快な会話に続けて、ロボイコについて、「ひとつだけすばらしいことがあります。それは彼がスカンディナヴィア[文学]協会の外国人会員として受け入れられたことです。これにつきましては、先生に心から感謝いたします。我が文学を知り、その祖国でそれを広めてくれる最初で唯一のロシア人として、彼はその榮譽に値します。そして、これは彼には言いようのない励みとなることと思います。」と述べている。その言に違わず、ロボイコはヴィリニウスで、1822年に、北欧文学についての著書を発表することになる。ロボイコにとって、ラスクは有益な教師であり、学問的情報源だったのである。因みに、ラスクが、ロボイコがスカンディナヴィア文学協会の外国人会員として受け入れられることを、ミュラーに感

謝したのは、当時ミュラーが協会の事務局を担当していて、尽力してくれたからである。しかし、理由は不明だが、ロボイコは、結局、この協会の会員にはならなかったようである。

さて、ラスクは、スウェーデンを出るに際して、国王フレゼリク6世へのミュラーの働きかけで、サンクト・ペテルブルグを経てカフカスへの研究旅行の奨学金として、2年間の予定で年に200リースダラを受けていたが、経由地のサンクト・ペテルブルグの滞在が長くなるにつれて将来の経済的不安がつのってきた。同時に、学問的ポストの保証されないコペンハーゲンと比べて、自分の能力をはるかに高く評価してくれたスウェーデンを涙を吞んで出立して以来、なじめない華美で人工的な都市サンクト・ペテルブルグでの孤独感に、ラスクの中には、故国デンマークへの郷愁が醸成されていった。当時の、サンクト・ペテルブルグにはデンマーク人はいることはいたが、それぞれが個別に生きて、デンマーク人牧師のいる教会もなく、まとまったデンマーク人社会は形成されていなかった。サンクト・ペテルブルグに住むデンマーク人の多くは、正に小国の悲哀を感じ、望郷の念を抱きながら、互いに結束し合うこともなく、町の片隅でひっそりと生きていたのである。ラスクもまたそのひとりであった。

また、当時、サンクト・ペテルブルグからロシアを南下してカフカスに到り、さらにインドに向かうことは、危険な行為であった。治安が不安定で生命の保証はないと言っても過言ではない状態であった。ラスクは、そのような旅に身の危険を感じ、恐れ、迷っていた。なぜ、命をかけてまで、カフカスを経由してインドへ行かなければならないのだろうか？ ラスクは、10月12日付のミュラー宛の手紙で、「フンボルトはロシアを通してインドへ行く計画を、不可能と判断して、断念してしまったと聞いたことがあります。なぜならば、途中にいる民

族はロシアから来る人には誰にでも敵意をむき出して、生きては自分たちのところを通らせないし、自分たちの土地の内部には入らせないからです。」と、その危険性に言及している。フンボルトとは、ドイツの自然科学者・政治家・旅行家のアレクサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt)(1769-1859) のことで、隊を組んでいろいろな国へ調査旅行に出かけた。1814年～1815年は、プロイセン国王の側近を務め、1818年には、同国王から東インドへの5年間の調査旅行を認められた。結局この旅行は実行に移されなかったが、ラスクのフンボルトへの言及はこの一連の事実を指している。フンボルトは、調査旅行に出かけるときには、豊富な支援のもとに調査隊を組織していた。ラスクはフンボルトの例を挙げることによって、完全装備で恵まれた旅行をしたフンボルトでさえ躊躇したと言われる、カフカスを通る旅の危険さを強調したかったのである。因みに、アレクサンダー・フォン・フンボルトの兄は、言語学者であり外交官でもあったヴィルヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von Humboldt)(1767-1835) で、ヨーロッパの言語ばかりでなく、バスク語、ネイティヴ・アメリカンの言語、アジアの言語にも興味をもち、晩年はサンスクリット語も研究した。

なお、カフカスの言語で、ノルド語やギリシャ・ラテン語(すなわち、インド・ヨーロッパ語族)と関係がある言語は、オセッティ語(現在は、ロシアの北オセチア共和国とグルジアの南オセチア自治州の多くの住民の言語で、イラン語派に属する)だけであることも、ラスクには分かってきた。実は、ラスクは、コペンハーゲンを発つときには、懸賞論文『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』の延長として、カフカスの言語を研究して、ノルド語の起源をもっと深く解明しようと思っていた。もしかすると、カフカスが北欧人たちの故郷であり、自分たちの祖先はカフカスから北上し、現在の北欧の地へ移住したのではないか、そうなれば、当然、ノルド語の起源もカフカスにあ

るかもしれないと考えていた。しかし、サンクト・ペテルブルグで、サンスクリット語やペルシャ語をはじめとする、アジアの諸言語を研究するうちに、カフカスは、ノルド語の起源を求めるという意味では、言語的にあまり価値がないことが分かったのである。ラスクの中では、命を懸けてカフカスを旅しながら、これまで実行してきたように、その土地土地の言語を習得していくための動機が失われたのである。そうすると、研究旅行の学問的目的は、サンスクリット語とペルシャ語、とくに、デンマークの言語学界で成果を期待されているサンスクリット語や、サンスクリット語の口語体で、経典が書かれたパーリ語の研究、およびそれらの言語の写本や文献の収集に絞られてくる。

そのようなとき、ラスクは、ニュロップからの手紙で、デンマーク人の外科医で植物学者ナタナエル・ヴァリック (Nathanael Wallich) (1786-1854) が、サンスクリット語の文法や辞書、サンスクリット語関連の資料を、インドから故国デンマークに送ったことを知らされた。ヴァリックは、デンマークのインドでの植民地セランボアに外科医として赴任したが、仕事とは別に、当地の植物に興味を引かれ、植物学者としても知られるようになった。デンマーク政府から、植物学関連の文献を購入する資金を得て、文献とともに、極めて多くの植物と種子をデンマークに送った。そのとき、インドで入手したサンスクリット語、ペルシャ語、アラビア語の文献も同時に送り、王立図書館に寄贈したのである。

この出来事はラスクに悩ましい選択を迫ることになる。まず、当時のサンクト・ペテルブルグでのラスクがおかれた状況を整理してみる。(1) サンクト・ペテルブルグの滞在は、スウェーデン滞在と異なり、居心地のいいものではなかった。(2) 孤独な外国生活が続いて、故国デンマークへの望郷の念が募っていた。(3) 与えられた奨学金はかぎ

られたもので、経済的に不安がつきまっていた。(4) カフカスを通してインドに行くという名目で、国王から旅行奨学金をもらっている手前、旅を続けなければならないという義務感と使命感が重くのしかかっていた。(5) インドに行くために、カフカスを経由する言語学的意味がなくなっていた。(6) サンクト・ペテルブルグからロシアを南下し、カフカスを旅するのは危険で、命懸けだといううわさを聞いていた。(7) インドで研究したいと思っているサンスクリット語関連の文献が、ヴァリックによってデンマークにもたらされたという知らせを受けた。

悩ましい選択とは、カフカスを経由してインドへ向かう研究・調査旅行計画の変更の問題であった。これに関しても、ラスクに強い影響をもつニュロップ、ミュラーそれにフューン島の莊園主ビュロウが関与した。まず、7月21日付のミュラー宛の手紙で、ラスクはこれからの旅行のための奨学金の増額を要請している。サンクト・ペテルブルグで何ヶ月か生活してみて、年間200リースダーラは、研究や旅行の費用としては少なすぎた。ラスクはその4倍の800リースダーラは必要だと訴えている。しかも、いつも個人的に経済的な援助をしてくれていたビュロウは、身内のひとりが破産したために、多額の埋め合わせをしなければならず、今回は援助を期待できないだろうとも述べている。つまり、ラスクがサンクト・ペテルブルグを出発して、インドへ向かうためには、どうしても国王からの奨学金の増額・あるいは追加が不可欠であった。それを可能にすることができるのは、国王の信任が厚いミュラーしかいなかったのである。

ラスクは、ミュラーからの返事と送金を待っている間に、前述のヴァリックの件を伝えるニュロップの手紙を受け取った。日付は8月27日となっているが、ラスクが受け取ったのは9月に入ってからである。ニュロップの手紙には、ヴァリックが送った資料の中には、サンスクリット語の文法が少なくとも3種類および辞書、ベルシャ語とア

ラビア語の多くの文献が含まれていることが書かれていた。ニュロップは、手紙のやり取りによって、サンクト・ペテルブルグでのラスクの孤独と不安をよく知っていた。ラスクの研究旅行の最終目的が、インドでサンスクリット語を研究し、資料を収集することであることもよく知っていた。手紙の文面には表われてはいないが、ラスクを常に温かい親心で見ていたニュロップは、資料不足のために、ヨーロッパではできなかったサンスクリット語の研究は、いまやデンマークでもある程度は可能になったこと、したがって、サンスクリット語の研究のために、命を賭してまでインドに行く必要はなくなったこと、重度のホームシックにかかっていると思われるラスクは、一度コペンハーゲンに戻って体調を回復すべきではないかということを伝えたかったのではないか。

ニュロップの手紙に反応して、ラスクは9月28日付のミュラーへの手紙でつぎのように書いている：「私はウィルキンズのサンスクリット語文法（ロンドン、1808）とセランポアで印刷された聖書の断片を入手いたしました。これらの資料を手に入れて以来、インドへ行ったときに準備不足にならないように、第一番目の課題として、日夜、この言語に励んできました。私のアイスランド語文法やアングロ・サクソン語文法と同趣旨で、新しい計画に基づいたデンマーク語版サンスクリット語文法をかなりの程度まとめてきました。この冬にはこの文法と語彙付きの読本を終わらせるつもりでおります。これらは、50のデーヴァナーガリー文字を個別の文字で表わす新しいシステムを考案しましたので、ローマ文字で印刷できます。その文字には、新規のものは少なく、他のヨーロッパの言語でだれもが知っているものか容易に認識できるものです。（中略）新着の資料を利用するために、1年だけ帰国して、この2冊を出版し、その後、パーリ語の研究とヴェーダや仏教関係の書籍の入手のために、海路で東インドへ向かうことにしてはいけなんでしょうか？（中略）私がこのお願いをしているの

は、命が惜しいからではなく、私の力のおよぶ最大・最良のことをしたいと心から熱望しているからなのです。先生からできるだけ早くお便りをいただきたいと思っております」。

なお、ウィルキンズのサンスクリット語文法とは、イギリスのオリエント学者 Charles Wilkins(1749-1839) による *A Grammar of the Sanskrita Language* を指す。ニュロップが手紙で知らせてくれたサンスクリット語文法の中に、このウィルキンズの文法も含まれていた。ウィルキンズは、東インド会社に勤め、10数年のインド滞在の間にサンスクリット語、ベンガル語、ペルシャ語に強い興味をもった。1786年のウィリアム・ジョーンズのカルカッタでの有名な演説以後、他の国々に先駆けて、イギリスではサンスクリット語の研究と資料の収集が進んでいた。また、この手紙から判断すると、ラスクは、サンスクリット語に翻訳された聖書の断片を言語資料として用いて、サンスクリット語の文法をほぼ書き終えていたことになるが、彼は常々「ある言語の語形変化表を作るには、その言語の「主の祈り」さえあればよい。」と豪語していた。ラスクは、わずかな言語資料で、その言語の文法構造の全体像を描くことができたのである。言語情報の乏しい当時にあつては、わずかな情報から全体像を導き出す才能は極めて貴重であった。

ラスクが言いたかったのは、つぎのようなことである。ストックホルムにいたころから学んでいたサンスクリット語を、サンクト・ペテルブルグでも研究し続け、すでに高い評価を得ていたアイスランド語の文法や古英語の文法と同様の形式で、サンスクリット語文法と読本の2冊を完成させる直前まで至っている。サンスクリット語で使用されているヨーロッパ人にはなじみのないデーヴァナーガリー文字を、だれにも理解しやすい独自のローマ文字に置き換える、具体的なシステムをすでに考案している。ただし、資料の乏しさを補うために、ヴァリックによってデンマークにもたらされたサンスクリット語の文法や

辞書を利用して、自分の文法と読本をより完全なものにしたい。それには1年は必要なので、とりあえずコペンハーゲンに戻る許可をいただけないだろうか？ そして、文法と読本を出版した後で、改めて、海路、デンマークの植民地セランボアがある東インドへ赴き、サンスクリット語の口語体で仏典の言語でもあるパーリ語を研究し、またサンスクリット語の最も古い時代の言語で書かれたリグ・ヴェーダに代表される4つのヴェーダや仏教関係の文献を収集したい。確かに、海路を選ぶのは、ロシアを南下してカフカスを通してインドへ到る道は危険であるせいもあるが、それは命を惜しんでいるのではない。コペンハーゲンでやるべきことをやって、その後、陸路では大量に運べない、研究に必要不可欠な書籍や辞書を船に積んで、インドに行きたい。そうすることが、今の自分にできる最良の選択である。ぜひ、自分の思うところを汲み取って、いいご返事をいただきたい。以上が、ラスクがミュラーに訴え、理解を求めたかったことである。なお、ラスクが、これまでの旅に、移動書斎とも言うべき図書や辞書を携帯していたことはすでに述べたが、ミュラーに対し「学者は、本を携帯していれば、どこにいても書斎にいることになります。本がなければ、槌と鉄床のない鍛冶屋のようなものです。」(1818年11月27日付の手紙)と述べ、旅行の途中であろうと、研究を継続するためには、所有している大量の書籍といっしょの移動の必要性を強調している。

ラスクは、また、ビュロウにもこの計画を打ち明けている。この手紙は、10月11日付であったと言われているが、保存されてはいない。内容はミュラーに宛てた手紙と同様の趣旨であったと思われる。これに対する、11月4日付のビュロウの返信があったらしいが、これも現存していない。ビュロウが、イェルムスレウとともにラスクの書簡集をまとめたビエロムの「なぜラスクはカフカスとインドに旅立ったか？」によれば、ビュロウはラスクの新しい計画に反対ではないが、決定権をもっているのはミュラーだから、ミュラー次第であると答え

ている。ラスクがスウェーデンでポストを得るかもしれないときには、「卑しい利益」に惑わされてはいけないと迫ったビュロウも、今回はラスクの考えにことさら反対はしなかったのである。ビュロウはラスクの手紙をミュラーに送り、ミュラーに判断を委ねた。上記のように、このとき、莊園主で財産家のビュロウとしては、身内の経済的な後始末のために、ラスクに経済的援助を与える余裕がなかった。自分に降りかかった火の粉を振り払うのに精一杯であったビュロウは、決定をミュラーに丸投げすることによって、責任を回避したのである。

ラスクは、ミュラーからの返事が届く前に、10月12日付のミュラー宛の手紙で、「まず1年間帰国して、比較言語的サンスクリット語文法と資料付きの読本を出版し、その後で、海路インドへ行くという私のこの前の計画について、先生からのお便りを拝見することを心待ちにしております。」と、再び計画変更を認めてほしい旨の手紙を書いたが、ミュラーはその2度目の手紙が届く前に、10月30日付で、ラスクの計画変更には反対する旨の返事を出した。その内容は以下のようであった。サンクト・ペテルブルグからカフカスへの旅行に関しては、自分の力でラスクのために奨学金を獲得してやった。今ラスクがサンクトペテルブルグから戻ってきたら、自分が国王や同僚に対して虚偽の申し立てをしたことになる。ラスクも虚偽の申請をしたことになる。ラスクが望んでいる追加の援助(3年間毎年200リースダーラおよびインドでの文献の購入経費として200~300リースダーラ)も認められる予定なので、このままカフカスからインドへ向かうべきである。それに、サンクト・ペテルブルグで、本来の研究から離れて、デンマーク語・デンマーク文化の情報を広めるために本屋を開こうなどという試みには、賛成できない。また、旅行しながら本を書こうというのも本筋から外れている。今ラスクがやるべきことは、研究したり、研究成果を発表したりすることではなく、インドへの研究旅行から帰国した後で利用できる資料や国家に貢献できる文献・資料を収集すること

である。

つまり、ニュロップが控えめに帰国を示唆し、ビュロウが一時帰国という計画の変更に否定的態度をとらなかったのに反して、ミュラーは計画変更に断固反対したのである。ミュラーが、ラスクをめぐる状況の変化とラスクの効率的の研究に考慮するよりも、自分の宮廷における立場を優先した結果であった。ミュラーがラスクの2度目の手紙をまだ受け取っていないかったということに関して、ピエロムは、前掲の「なぜラスクはカフカスとインドへ旅立ったのか？」の中で、「それまでにミュラーがラスクの手紙を受け取っていたとしても、それが事態を変えたかどうかは疑わしい。」と述べ、ミュラーの決定は自己保身、自分の対面のためだと批判している。ラスクは、ミュラーに対して反論を試みたものの、ニュラーのおかげで、名目だけの教授とは言え、教授の称号を授けられ、カフカスからインドへの研究・調査旅行のための2年間の奨学金を認めてもらい、今回さらに3年間の奨学金を約束してもらった。その恩義と義理を考えると、結局ミュラーの意向に背くことはできなかった。こうして、ラスクは、自分の本当の意思ではないけれども、サンクト・ペテルブルグからの旅立ちを覚悟せざるを得ない状況におかれたのである。

しかし、旅立ちにはふたつの問題があった。ひとつは、危険な旅にだれを助手として伴うかということであり、もうひとつは奨学金がいつ届くかということであった。まず第一の助手の問題だが、何人かの候補者がいたようであるが、結局は適当な者が見つからなかった。多くの同伴者を従えたフンボルトでさえ避けた、危ないカフカスを、「移動書斎」を携えて、馬車での一人旅を余儀なくされることになったのである。第二の奨学金の問題だが、ラスクは、冬をやり過ごした1919年3月頃には、すっかり出立の準備ができていたのだが、なかなか奨学金は届かなかった。やっと奨学金が届いたときは、雪解けで道

がぬかるみ、出立できなかった。天候の回復を待って、最終的に、ラスクがサンクト・ペテルブルグを後にしたのは、6月13日のことであった。

ラスクが、1816年の秋にコペンハーゲンを出発したときは、自分から望んだ旅であった。コペンハーゲンで、大学のポストが得られず、経済的にも困窮し、将来の保証もなく、とにかくスウェーデンで活路を見出そうという意欲に燃えていた。閉塞状況の打開の意気込みがあった。しかし、1年3ヶ月滞在したスウェーデンを離れたときは、デンマークの国民感情から、ビュロウには「卑しい利益」に惑わされないようにと非難され、ミュラーには「裏切り者」呼ばわりされ、スウェーデンでのポストを断念し、涙を飲んで仕方なく、それでも、インドでサンスクリット語を研究したいという希望に燃えた旅立ちであった。今回の、サンクト・ペテルブルグからの出発は、もっぱらミュラーへの義理に縛られたものであった。一度コペンハーゲンに戻って、サンスクリット語の文法を出版してから、再出発したいという願望は打ち碎かれた。デンマークでもサンスクリット語関連の資料が整い、インドに出かけてのサンスクリット語の研究という動機も薄れ、治安の悪いカフカスへの恐怖におののきながらの、孤独な旅立ちとなったのである。

ラスクは、スウェーデンに滞在していたときは、いくつかの学術的ポストの提示が話題になるほど、すばらしい学問的な業績を残した。懸賞論文の『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』が日の目を見、初めての学問的な古英語文法とイエスベルセンが称賛した『アングロ・サクソン語文法』が出版され、『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』が、『アイスランド語あるいは古ノルド語概説』として、スウェーデン語で改訂版が出されたのは、ラスクがストックホルムに滞在しているときであった。それに比して、1年5ヶ月を過ごしたサンクト・ペテルブルグでは、ラスクは学問的な業績を残していない。

ラスクにとっては、ストックホルムが北欧の人たちが柔らかな日差しの下で開放感を味わう明るい夏だったとしたら、サンクト・ペテルブルグは暗い冬であった。しかも、ラスクにとっての悲劇は、その長く陰鬱な冬はまだ始まったばかりだったことである。

(この稿続く)

参考文献

- Andersen, H. 1966. *Oldnordisk Grammatik*³, København.
- Andersen, Poul. 1937. "Rasmus Rask", in: *Selskab for Nordisk Filologi. Fra Rask til Wimmer* (København), pp.7-33.
- . 1938. *Rasmus Rask: De fynske Bønders Sprog*, København.
- Anderson, Ingvar and Jörgen Weibull. 1988. *Swedish History in Brief*, Stockholm. (潮見憲三郎訳. 1988. 『スウェーデンの歴史』、文真堂.)
- Antonsen, Elmer H. 1962. "Rasmus Rask and Jacob Grimm: Their Relationship in the Investigation of Germanic Vocalism", *Scandinavian Studies* 34, pp.183-94.
- . 1975. *A Concise Grammar of the Older Runic Inscriptions*, Tübingen.
- Bandle, Oscar et al. (ed.). 2002. *The Nordic Languages* Vol.1, Berlin/New York.
- . 2005. *The Nordic Languages* Vol.2, Berlin/New York.
- Bang, Jørgen. et al. 1978. *Gyldendals Tibinds Leksikon*, København.
- Bekker-Nielsen, Hans and Ole Widding. 1972. *Arne Magnusson: The Manuscript Collector*, Odense.
- Bjerrum, Marie. 1956. "Hvorfor kom Rask ikke til Sverige i 1810?", *Festskrift til Peter Skautrup* (København), pp.375-81.
- . 1957. "Hvorfor rejste Rask til Kaukasus og Indien?", *Danske Studier* (September), pp.80-100.
- . 1959. *Rasmus Kristian Rasks Afhandlinger om det danske sprog*, København.
- . 1982. "Rask, Rasmus", *Dansk biografisk Leksikon*³ XI, (København), pp.646-51.
- Blangstrup, Chr. et al. 1915-1930. *Salmonsens Konversations Leksikon*², 26 Bind, København.
- Bosworth, Joseph. 1823. *The Elements of Anglo-Saxon Grammar*, London.
- Braune, Wilhelm. (Neu bearbeitet von E.A.Ebbinghaus) 1973. *Gotische Grammatik*¹⁸, Tübingen.
- Dahlerup, Verner et al. 1919-56. *Ordbog over det Danske Sprog*, 28 Bind, København.
- Danstrup, John og Hal Koch et al. 1962-66. *Danmarks Historie*, 14 Bind, København.

- Dideriksen, P. 1960. *Rasmus Rask og den grammatiske tradition*, København.
- Christensen, Carl C. 1932. "Rasmus Rask — Hans død, og hvad han efterlod sig", *Danske Studier*, pp.1-21.
- Djupeadal, Reidar. 1956. "Rasmus Rask og 'Videnskabernes Selskabs Danske Ordbog'", *Festskrift til Peter Skautrup* (København), pp.383-96.
- Dyggve, Holger P.N. 1932. "Tre ikke tidligere trykte breve fra Rasmus Rask", *Danske Studier*, pp.139-47.
- . 1933. "Finn Magnussen og Rasks store rejse", *Danske Studier*, pp.17-22.
- Flom, George T. 1939. "On the History of Views about the Vowel System of Old Norse", *JEGP* 38, pp.549-51.
- Fussing, Hans H. 1932. "Raskinana", *Danske Studier*, pp.148-56.
- Gordon, E.V. 1962. *An Introduction to Old Norse*, London.
- Grimm, Jacob. 1812. "Vejledning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog af Rasmus Kristian Rask", *Allgemeine Literatur-Zeitung* 31-34. (Repr. in : *Jacob Grimm, Kleinere Schriften* 4 (Hildesheim/Zürich/New York,1991) , pp.65-73 : *Kleinere Schriften* 7 (Hildesheim/Zürich/New York,1991), pp.515-30).
- . 1822. *Deutsche Grammatik* Bd.I². Göttingen.
- . 1825. "Frisisk Sproglære, udarbejdet efter samme plan som den islandske og angelsaksiske af R.Rask" in: *Göttingische gelehrte Anzeigen* (1826) , pp.81-107 (Repr. in: *Jacob Grimm, Kleinere Schriften* 4 (Hildesheim/Zürich/New York,1991), pp.361-76).
- Haugen, Einar. 1946. *The Scandinavian Languages*, London.
- 橋本淳他. 1999. 『デンマークの歴史』、創元社.
- 早野勝巳. 1991. 『アンデルセンの時代』、東海大学出版会.
- Henriksen, Carol and Johan van der Auwera. 1994. "The Germanic Languages" in: Ekkehard König and Johan van der Auwera (ed.) *The Germanic Languages*, London/New York, pp.1-18.
- . 1996. "Rask, Rasmus Kristian", in: Harro Stammerjohann (ed.) *Lexikon Grammaticorum* (Tübingen), pp.774-76.
- Hirt, Hermann. 1931. *Handbuch des Urgermanischen* I. Teil, Heidelberg.
- Hjelmslev, Louis. 1932-35. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger*, 3 Bind, København.

- . 1933. "Rasmus Rask og Sverige 1812-1818 belyst ved hans breve til A.A. Afzelius", *Nordisk Tidskrift för Vetenskap, Konst och Industri* IX, pp.445-56.
- . 1951. "Commentaires sur la vie et l'œuvre de Rask", *Travaux du Cercle Linguistique de Copenhague*, Vol.XIV, 1973, pp.3-16.
- Hjelmlev, Louis og Marie Bjerrum. 1941-68. *Breve fra og til Rasmus Rask*, 3 Bind. København.
- Horstbøll, Henrik et al 1988-98. *Danmarks Historie*, 3 Bind. København.
- Heusler, A. 1967. *Altisländisches Elementarbuch*⁷.
- Iversen, R. 1973. *Norron Grammatikk*, Oslo.
- Jakobsen, Helge Seidelin. 1986. *An Outline History of Denmark*, København. (高藤直樹訳. 1995. 『デンマークの歴史』、ピネバル出版.)
- Jespersen, Otto. 1891. *Studier over engelske kasus, med en indledning: Fremskridt i Sproget*, København.
- . 1918. *Rasmus Rask, København/Kristiania*.
- . 1922. *Language: Its Nature, Development, and Origin*, New York.
- . 1926. *Sprogets Udvikling og Opståen*, København.
- . 1932. "Rasmus Rask", *Politikens Kronik*, 14.11.32.
- . 1938. *En sprogmands leved*, København.
- 榮宏一. 1975. 「ラスムス・ラスク」、月刊『言語』Vol.4, No.9, pp.78-83.
- Jones, William. 1786. "On the Hindu's", in: Lord Teignmouth. *The Works of Sir William Jones* Vol.1(London,1807), pp.19-34.
- Jónsson, Finnur. 1894-1901. *Den Oldnorske og Oldislandske Litteraturs Historie*, København.
- . 1900. *Snorri Sturluson:Edda*, København.
- . 1911. *Snorri Sturluson:Heimskringla*, København.
- . 1921. *Norsk-Islandske Kultur- og Sprogforhold*, 3 Bind. København.
- . 1930. *Island:fra Sagatid til Nutid*, København.
- . 1932. *De gamle Eddadigte*, København.
- 亀井孝、河野六郎、千野栄一(編). 1988 - 93. 『言語学大辞典:世界言語編』全5巻、三省堂.
- Karlson, Gunnar (English Translation by Anna Yates). 2000. *A Brief History of Iceland*, Reykjavik. (岡沢憲英監訳. 小森宏美訳. 2002. 『アイスランド小史』、早稲田大学出版局.)

- 風間喜代三. 1978. 『言語学の誕生』、岩波書店.
- Kierkegaard, Søren. 1843. *Enten-Eller*, in: K. Hansen. *Søren Kierkegaard: Skrifter i Udvalg* (København, 1965), pp.7-73.
- Kufner, Herbert L. 1972. "The Grouping and Separation of the Germanic Languages" in: Frans von Coetsem and Herbert L.Hefner (ed.) *Toward a Grammar of Proto-Germanic*, Tübingen, pp.71-97.
- Kuhn, Hans. 1962. *Edda I. Text*, Heidelberg.
- . 1968. *Edda II, Kurzes Wörterbuch*, Heidelberg.
- Kålund, Kr. 1897. "Bidrag til R.Rasks lævned", *Dania* 4, pp.129-43.
- Lund, Jøren et al. (ed.), 1994-2002. *Den Store Danske Encyklopædi*, 20 Bind med Supplement, København.
- Malone, Kemp. 1952. "Rasmus Rask", in: Thomas.A.Sebeok(ed), *Portraits of Linguistics Vol.I* (Bristol, 2002), pp.195-99.
- Mossé, Ferdinand. 1956. *Manuel de la langue gotique*², Paris.
- Müller, P.E. 1833. "Nekrolog: Professor R. Chr. Rask", *Danske Litteraturtidene*, pp.1-31.
- Nielsen, Hans Frede. 1989. *The Germanic languages: Origins and Early Dialectal Interrelations*, Tuscaloosa/London.
- Noreen, Adolf. 1970. *Altnordische Grammatik I* Tübingen.
- Nygaard, M.1066. *Norron Syntax*, Oslo.
- Ny kgl.Samling 389 ek 80 (Rasks dagbog 1818-32)*.
- Pedersen, H. 1916. *Et Blik på Sprogvidenskabens Historie*, København.
- . 1924. *Sprogvidenskabens i det nittende Aarhundrede: Metoder og Resultater*, København.
- . 1932. "Indledning", in: Louis Hjelmslev. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger* Bind I (København), pp.XIII-IV.
- Petersen, N.M. 1834. "Bidrag til Rasmus Kristian Rasks levned", *Samlede Afhandlinger af N.M.Petersen* Første Del (København, 1870), pp.217-343.
- Prokosch, E. 1938. *A Comparative Germanic Grammar*, Baltimore.
- Ranke, F. und D.Hofmann. 1967. *Altnordisches Elementarbuch*, Berlin.
- Rask, Kirsten. 2002. *Rasmus Rask — store tanker i et lille land*, København.
- Rask, Rasmus Kristian. 1811. *Vejledning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog*, København.
- . 1817. *Angelsaksisk Sproglære tilligemed en kort Læsebog*, København.

- . 1818. *Anvisning till Isländskan eller Nordiska Fornspråket*. Stockholm. (Geroge Webbe Dasent (trans.) and T.L.Markey (New Edition). 1976. *Rasmus Kristian Rask: Grammar of the Icelandic or Old Norse Tongue*, Amsterdam.)
- . 1818. *Undersøgelse om det Islandske eller gamle nordiske Sprogs Oprindelse*, in: Louis Hjelmslev. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger Bind I*. København. 1932.
- (Niels Ege. (trans.).1993. *Rasmus Rask: Investigation of the Origin of the Old Norse or Icelandic Language*. Copenhagen.)
- . 1825. *Frisisk Sproglære*. København.
- . 1826. *Forsøg til en videnskabelig dansk Retskrivningslære*. København.
- . 1830 a. *A Grammar of the Danish Language for the Use of Englishmen*. København.
- . 1830 b. *A Grammar of the Anglo-Saxon Tongue* A New Edition (Trans. by B. Thorp), København.
- . 1932. *Kortfattet Vejledning til det oldnordiske eller gamle islandske Sprog*. København.
- Robinson, Orrin W. 1992. *Old English and its Closest relatives*, Stanford.
- Rønning, F. 1887. *Rasmus Kristian Rask. Et Mindeskraft i anledning af Hundredårsdagen for hans Fødsel*. København.
- 新谷俊裕(訳注). 1988. 『オットー・イエスベルセン:ラスムス・ラスク』、大学書林.
- Skårup, Povl. 1964. *Rasmus Rask og Færøsk*, København.
- Stenersen, Øivind and Ivar Libæk. 2003. *The History of Norway: from the Ice Age to Today*, Lysaker. (岡沢憲美監訳. 小森宏美訳. 2005. 『ノルウェーの歴史』、早稲田大学出版局.)
- Sverdrup, Jakob. 1920. "Av Sprogvidenskabens Historie. Ihre - Rask - Grimm". *Nordisk Tidskrift för Vitenskap och Industri* I, pp.459-77.
- Søndberg, Olaf. 2001. *Danmarks Historie*, Århus.
- 谷口幸男. 1973. 『エッタ: 古代北欧歌謡集』、新潮社.
- . 1976. 『エッタとサガ』、新潮社.
- Thomsen, Vilh. 1887. "Rasmus Kristian Rask". *Vilh. Thomsen Samlede Afhandlinger* Bind I (København/Kristiania. 1919), pp. 125-44.
- . 1925. "Rask, Rasmus Kristian". in: Chr. Blangstrup (ed.). *Salmonsens Konversations Leksikon* Bind XIX (København), pp.937-39.

- Thomsen, Vilh.(Kr.Sandfeld). 1940. "Rask, Rasmus Kristian," in: P. Engelstøf og Svend Dahl (ed.), *Dansk biografisk Leksikon* XIX (København), pp.180-94.
- Thorsoe, Alex. 1879. *Den Danske Stats Historie fra 1814-1848*. København.
- Topsoe=Jensen, H. 1928. *Oehlenschläger Poetiske Skrifter* III. København.
- Traustedt, P.H. (red.). 1964-66. *Dansk Litteratur Historie*, 4 Bind. København.
- Valfells, S. and J.E.Cathy. 1981. *Old Icelandic*. Oxford.
- Vennemann, Theo. 1994. "Dating the Division between High and Low Germanic: A Summary of Arguments" in: T.Swan et al. (ed.), *Language Change and Language Structure: Older Germanic Languages in a Comparative Perspective*, Berlin/New York, pp.271-303.
- Verner, Karl. 1876. "Eine ausnahme der ersten lautverschiebung", *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* XXIII. pp.97-130.
- Voyles, Joseph B. 1992. *Early Germanic Grammar: Pre-, Proto-, and Post-Germanic Languages*, San Diego.
- Wimmer, Ludv. F.A. 1887. *Rasmus Kristian Rask, København*.
- 山本文明(Yamamoto, Fumiaki). 1986. "On Rask's Old English Grammar". In *Honor of Shigeru Takebayashi* (Kenkyusha), pp.550-65.
- . 1995. 「Rask, Rasmus (Kristian)」, 佐々木達・木原研三編, 『英語学人名辞典』(研究社), pp. 284-85.
- . 1996. 「ラスク Rask, Rasmus Kristian」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編, 『言語学大辞典』第6巻(三省堂), p. 1518.
- . 2005. 「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——誕生から大学入学まで——」『異文化』6(法政大学国際文化学部), pp.143-90.
- . 2006. 「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——大学入学直後——」『異文化』7(法政大学国際文化学部), pp.51-77.
- . 2008. 「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——新しい言語研究への道——」『異文化』9(法政大学国際文化学部), pp.203-307.
- Zaluska-Strömberg, A. 1982. *Grammatik des Altisländischen*, Hamburg.